

令和 5年 2月 10日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院看護福祉学研究科長 殿

主査 山田 律子

副査 太田 喜久子

副査 桑原 ゆみ

副査 平 典子



このたび 宮地 普子 氏 にかかる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目 アルツハイマー型認知症高齢者のひとり歩き (wandering) の意味

2 論文要旨 すでに配布のとおり

3 学位論文審査の要旨

博士論文中間研究報告会の意見を踏まえて、研究目的および方法、結果、考察の修正、表の追加、さらに論文全体を通して文章の推敲がなされ、最終提出された学位論文は独創性が高く、価値ある論文として仕上げられていた。

本研究は、アルツハイマー型認知症高齢者である本人の生活において捉えられる「ひとり歩き」の意味について、1年半かけて本人の参加観察と介護する家族や介護職員からのインタビューによって明らかにしたものである。2022年現在、認知症を原因とする行方不明者が17,636人と2012年以降は増加傾向にある中、徘徊による本人の安全確保と介護者の疲弊を取り除くことが急務であり、そのためにも目的のない行動として捉える徘徊ではなく、本人がどのような思いで歩いているのか、その生活から捉える「ひとり歩き」の意味を明らかにすることは、新たなケア方法の提案にも繋がる意義ある論文である。

研究デザインは質的記述的研究デザインである。構築主義認識論の立場から、データの文脈を維持しながら分析するBraun and Clarke (2006) の分析手順のガイドラインを用いて、テーマ分析が丁寧に行われていた。その結果、

【つながりの発露】【確かにへの充足】【拠りどころ探し】という3つのテーマが明らかになり、アルツハイマー型認知症高齢者の「ひとり歩き」は自己の安定を求める行動であるとの意味を見い出した。

審査委員からは、今後の研究の発展に向けて、本研究の独自性でもある「本人の生活において捉えたひとり歩きの意味」であることが伝わる表題の工夫や、序論や文献検討で先行研究と本研究との違いを明確に記述すること、認知症高齢者と一緒にせずにアルツハイマー型認知症ゆえの特徴も踏まえて考察すること、本研究のテーマのうち「拠りどころ探し」は特に重要であり、構成する3つのサブテーマをさらに洗練することなどの助言がなされた。

本研究は、独自性が高く、発展性に富む研究であり、今後のケアを変えていく力のある実践的にも有用な論文であることが高く評価された。本審査委員会は総合的に判断し、本論文が博士論文としての水準を有しており、博士の学位を授与するに値するとの結論を得た。

4 最終試験の要旨

最終試験は、プレゼンテーション、質疑応答、博士論文審査基準による評価、審議というプロセスを経て行われた。プレゼンテーションは、研究の背景・意義、研究目的から結論に至るまで非常にわかりやすく、内容が明確に伝わるものであった。審査委員からの質疑に対する申請者の応答も的確であった。

審査の結果、本学位論文が新規性と独創性に富み、実践に大きく貢献するものであり、今後の発展性も期待される優れた価値を有することを全審査委員が一致して認めた。

以上の結果 宮地 普子氏 は、博士（看護学） の学位を授与する資格がある と判定する。
博士（臨床福祉学） ない